

【vol.64】空気の読み方について ～その1～ プレイの考え方について

どうも、大沼です。

vol.58 から7回に渡って続けてきたディミニッシュ・スケール関係ですが、前回で終わりになります。

あの辺りのポジションと理屈を抑えておけば、今後、スケールを使う時も、もう少し発展的に学びたい時も、迷う事は少なくなってくるでしょう。

この講座は全 vol.80 なのですが、今後やることとしては、メロディックマイナー系の必須スケールと、これまでやったことの総まとめになります。

最初は、各種モード(ドリアンとか)の解説もやろうと思っていたのですが、それだと確実に vol.100 を超えてしまい、何時まで経ってもこの講座が終わらないので、そちらは別で作っていきます。

なのでこの講座では、

- ・メジャー、マイナーの両ペンタ
- ・メジャースケール(アイオニアンスケール)
- ・ナチュラルマイナースケール(エオリアンスケール)
- ・ハーモニックマイナー系の一部
- ・メロディックマイナー系の一部
- ・ダイアトニックコード系とそのアレンジ数種

とこの辺りの内容で終わります。

(※ホールトーンみたいな特殊スケールも最後の方で少しやりますが)

実際、この辺りを抑えておけば、一般的な楽曲の演奏では、ほぼ困ることがなくなります。

統計の取りようがないのでアレですが、世の楽曲の8割くらいはいけるでしょう。

とりあえず、ペンタと、メジャー&マイナーの両スケール、後はマイナーキーのドミナント7thの対処法がわかっているれば、大体どうにかかりますからね。

(※特殊な楽曲やプレイを除いて)

それに加えて、ハーモニック、メロディックの両マイナースケールの基本だけでも知っていれば、一般平均から見て、ギタリストとしては相当な知識量です。

普通のロック、ポップスなら、それでほぼ対応できますので。

と言う事で、今回は、高度なモノを覚えると陥りがちな罫、

『空気の読み方』

について少し考えてみましょう。

すでに実感がある人もいるかもしれませんが、高度なスキルを身につけると、とにかくそれを使いたくなってきます。

ですが、それらのスキルは、一般的には、言ってしまえば『複雑でわかりにくいモノ』なのです。

最近学んだディミニッシュスケールなども、コード進行的に大丈夫だからといって、むやみに使いまくったりすると、『楽曲の雰囲気ぶち壊し』みたいなことになりかねません。

その辺り、楽曲の雰囲気に合わせて＝空気を読んで、“音楽的に問題ない範囲で” 高度なテクニックをサラッと入れられるような、そんなバランス感覚を学んでいきましょう。

いつもの様に、題材とするコード進行は、key=Am 時の II – V – I です。

The image shows a musical score for a II-V-I progression in the key of Am. The top staff is a treble clef with a 4/4 time signature. It contains three measures, each with a chord symbol above it: Bm7(b5) in the first measure, E7 in the second, and Am7 in the third. The bottom staff is a guitar TAB with three empty lines, labeled 'TAB' on the left side.

今回は『空気の読み方について』なので、「空気を讀んだプレイ」と「讀んでないプレイ」を比較していきます。(※もう少し言えば、シンプルなプレイと高度なプレイを、何時、どこまで使うのか？という話です)

このコード進行の上でソロ(や何かしらのフレーズ)を弾く、となった場合、これまで色々なことを学んできた我々には、上の3つのコードの内、

V 7(E7)の上で何か色々やれそうなのがわかりますよね？

例えば、最近学んでいたディミニッシュだったり、
なんだったらEオルタードなんかも使えます。

ですが、ジャズやフュージョン、ファンクなどのフリーセッションの様な
場であればまだしも、例えばバラードみたいな歌モノの楽曲で、そんな謎スケールを
使ってしまった日には、周りから白い目で見られること請け合いです。

要するに、音楽理論的に(一応ハーモニー的にも)大丈夫だからといって、
何時でもどこでも、複雑で高度なプレイをしても良いわけではない、という事です。

なので、その辺りの『さじ加減』を学んでいく、と。

ではまず、前提として、『複雑で高度なプレイをしても良い場』と
『いけない場』について、大雑把に分けてみます。

1、複雑で高度なプレイをしても良い場(※もしくは比較的許される場)

- ・ジャズ、フュージョン系(ジャズセッション等、特に楽器オンリーでやる時)
- ・ファンク、ソウル系セッション
(こちらも楽器オンリーに近いフリーセッション等だと安全)
- ・その他のジャンルで、そもそも楽曲自体が複雑で高度な作りのもの

2、複雑で高度なプレイをしてはいけない場(※もしくは出来るだけやらない方が良い場)

- ・歌モノ楽曲全般
(特に楽曲全体のハーモニーがシンプルに作られている、ロック、ポップス等)
- ・ジャズ系など複雑寄りなジャンルでも、ヴォーカルメインのシンプルな曲
(と言うよりは、ハーモニーを複雑にするべきではない雰囲気の時)

と、かなり大雑把ですがこんな感じです。

まとめると、大概の歌モノの楽曲、特に
「コアな音楽ファン以外の、一般的な人達が普段聴いているような音楽(楽曲)」では、
極力、変な事はするべきではない、という事になりますね。

後、好き勝手やって良い場としては、

- ・ 自分1人で練習している時
- ・ 気心知れた仲間との、冗談の通じるセッションやバンド練習
- ・ 自分のオリジナル曲や、自分主催のライブ(どうなっても自分で責任をとれるヤツ)

みたいな所もありますね。笑

色々を書きましたが、まあ要するに、

『楽曲や、その場の雰囲気はぶち壊しにならないのであれば、それはOK』

と言う感じです。

全体のバランスと許容範囲の問題ですね。

『シンプルなもの』と『(ハーモニー的に)高度なもの』が対極に位置しているとして、
今、演奏しているその楽曲や雰囲気がどの辺りにあるのか？(どちら寄りにあるのか？)

そういったことを考えながら、自分がやるべき事を選んでいきます。

その楽曲や雰囲気がどの辺りになるのか？を判断する



複雑で高度なもの

シンプルなもの

次に、ここまでは「楽曲全体」の視点から見てきましたが、プレイするもの(実際に弾くフレーズ自体)にも、『シンプル⇄高度』のバランスがありますよね。

例えば、ハーモニー的にそれなりにレベルが高めな、歌モノ楽曲があったとします。

で、その曲の中で、先ほどのⅡ－Ⅴ－Ⅰの進行が出てきて、
そこで何かしらフレーズを弾くとしましょう。

※key=Am、Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ

わかりやすいので、題材を E7 の場所のみに限定しますが、単純に選択肢としては、オルタードスケールだったり、ディミニッシュスケールだったり、色々と出来そうですね。

ですが、如何に楽曲自体が高度寄りな雰囲気だからといって、そこでオルタードスケールなどを使ったら、もしかしたらそのプレイは、(ハーモニー的に)複雑すぎる事になるかも知れません。

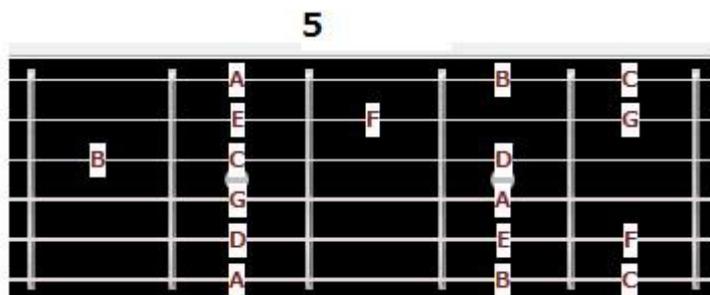
なので、まず最もシンプルなモノ(音選び)として、『その時バックで鳴っているコードのコードトーンをメインに弾く』という方向でフレーズを考えてみましょう。(主に E7 の部分)

使うスケールの的に見るならば、Am ペンタ、A ナチュラルマイナースケールをベースに、V 7(E7)の部分では、EHmp5↓スケール(=A ハーモニックマイナースケール)に切り替えるのが基本でしたね。

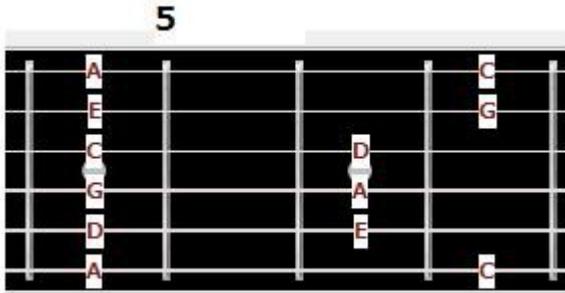
まず最初に、6弦5フレットのA音基準に見て、その周辺のスケールポジションで考えてみましょう。

こちらもおなじみですが、使うポジションとしてはここですね。

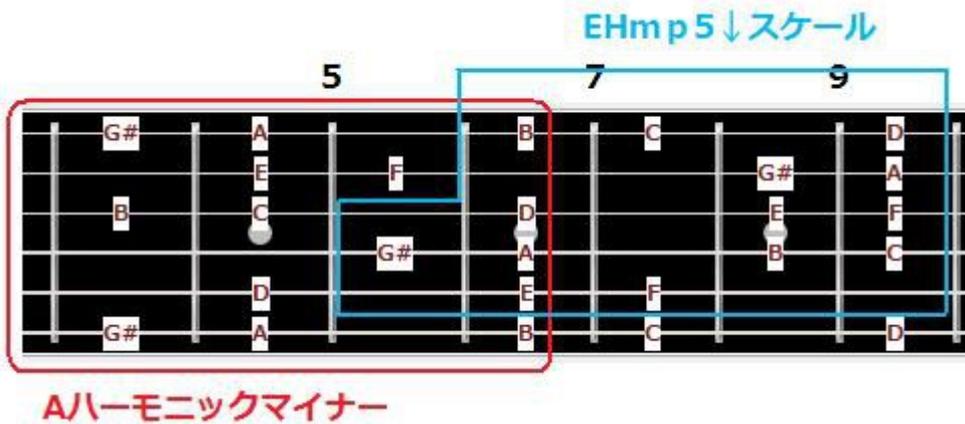
※A ナチュラルマイナースケール



※A マイナーペンタ



※EHmp5↓スケール(=A ハーモニックマイナースケール)



スケールの観点だけを見ると、これらを切り替えていく事になるのですが、最初はもっとシンプルに『コードに対して(安定した)音を選ぶ』と言う事をやっていきます。

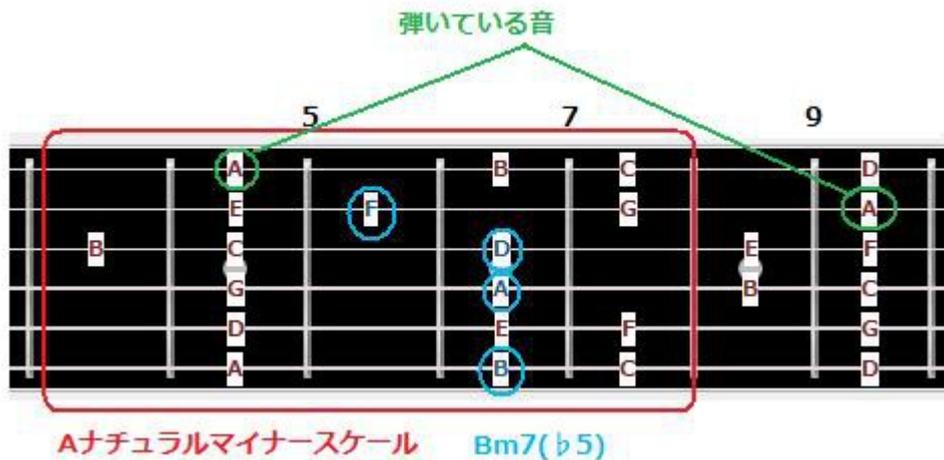
譜例 1

とりあえず今のところは、楽曲のジャンルやリズム(ビート)などは無視しているので、『それぞれのコードに対してどの音を選んでいるのか?』だけに注目してください。

まず1小節目は、バックのコードはBm7(♭5)です。

弾いている音は、Bm7(♭5)のルート音であるB音から見て
m7th(♭7th)にあたるA音ですね。(G音から全音チョーキングしてA音へ)

Bm7(♭5)には元々 m7th が含まれているので、
ちゃんとコードトーンを弾いている事になりますね。



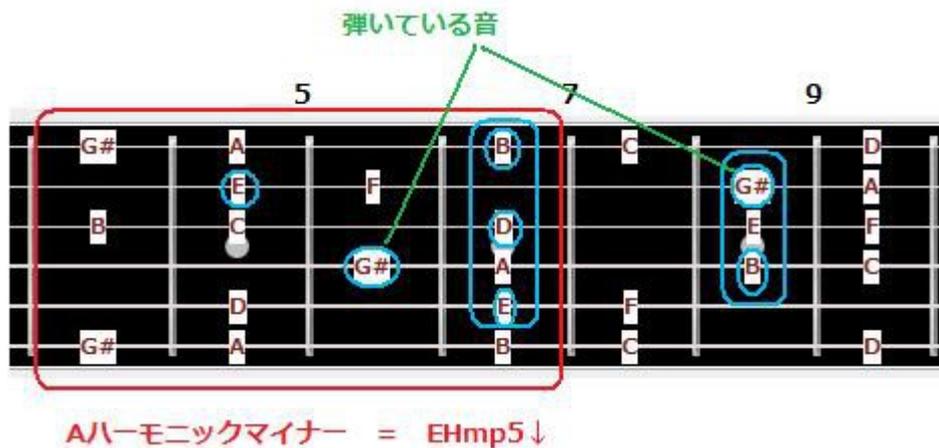
今回は m7th を弾いていますが、コードトーンを弾く、となった場合、
root、3rd、5th(と 7th)のどれかを弾けばOK という事ですね。

コードトーンを弾いている限り、ミスにはなりませんし、ハーモニー的にも、
大方、問題ありません。(※厳密にはハーモニー的にキツイ場合もあるのですが、
今は特に気にしなくても良いです)

この方法論をベースに残りの2つのコードも見ていきましょう。

次のE7に対してですが、弾いている音はG#ですね。
(※G音から半音チョーキングでG#音にしている)

E7のルート音であるE音から見ると、G#音はM3rdの音になるので、
こちらもしっかりとコードトーンを弾いています。



G#音はAナチュラルマイナーに含まれていない音で、その部分(コード、今回はE7)がAハーモニックマイナー系のモノに変わっている事を決定付けている音なので、この音を弾くと、特に強くハーモニーの変化を感じます。

そして最後の Am7 の部分はそのまんま、1st=root 音である A 音を弾いているだけです。

譜例1はそれぞれのコードに対して1音ずつしか弾いていないので、フレーズ的には、良く言えばシンプル、悪く言えば面白みの無いものです。

ですが実際問題、普通の歌モノの楽曲などでは、音使いとしてはこの位+αで十分だったりもします。(※当然、状況、曲調にもよります)

まあ、実際に弾くとなった場合は、もう少し音数を増やしたり、符割を工夫したり、アーティキュレーションも付け加えたりしたほうが、フレーズとしては良くなりますね。

とりあえずは、シンプルでベーシックな考え方の事例として、最大限に単純化したものが譜例1になります。

こういったことを自然に出来るようになる為の、アドリブ(ソロプレイ)としてのこの手のフレーズの練習法ですが、こんな感じです。

- 1、コード進行のコード1つ1つに対して、1~3音程度、弾く音を選ぶ
(基本的には、バックで鳴っているコードのコードトーンから少ない音数で選ぶ)
- 2、最初はあまり(フレーズの)音数を増やさずに、出来るだけロングトーンでフレーズを弾く(ギターソロを弾くというより、ゆったりとメロディーを弾くつもりで)
- 3、コードがチェンジする時、今弾いている音から出来るだけ近い場所にある、次のコードのコードトーンに移る(出来るだけ半音、無理なら全音~それ以上)

4、この方法論をベースに、慣れてきたら徐々にフレーズを複雑にしてみたり、もっと自由にフレーズを作ってみる

と、こんな感じですね。

これを繰り返している内に、それぞれのコードとスケールのインターバル感が耳で判別出来る様になってきます。

そうなってくると「今、頭の中で鳴っている音が、指板上でどこを弾けば鳴るのか？」がわかってくるのでフレーズの自由度が増していきます。

さて、今回は『空気の読み方について』というテーマで、プレイの方法論としては、シンプルな方(コードトーンベースで考える)を紹介しました。

最後に、3つほど譜例のサンプルを載せて終わりたいと思います。

譜例 2

The image shows a guitar TAB for three measures. The first measure is labeled Bm7(b5) and has a single note on the 5th string at the 5th fret. The second measure is labeled E7 and has a single note on the 5th string at the 6th fret. The third measure is labeled Am7 and has a single note on the 5th string at the 7th fret. The TAB is labeled 'TAB' on the left side.

これは、Bm7(b5)に対しては b5、E7に対しては root、Am7に対しては P5th と、それぞれコードトーンを弾いていますね。

別にこのままでも、スライド(グリス)やヴィブラートなどで色をつければ、フレーズっぽくする事も出来ます。

ですがそれだとイマイチ面白くないので、もう少し音やアイデアを増やしてみましよう。

譜例 3

♩ = 90

S-Gt

mf

Bm7(♭5)

1 2

7 5 7

5 5 (5)

5 5 7

E7

Am7

3 4

full

full

full

full

full

full

7 5 5 7 5 7 (7) 7 5 (7)

9 8 10 8 10 10 (10)

T
A
B

基本的に、強調したい音(と言うかメインで狙っている音)は譜例2と同じです。

3小節目ではオクターブ上のE音(Am7にとってのP5th)を狙っています。

フレーズを感じとしては、結構ロック色の強いものになりました。

曲調にもよりますが、普通の曲で「ギターソロ」と言ったら、初期段階では、大方、ロック系のプレイングをベースに考えておけば、そこまで問題は起こらないでしょう。(※特にエレクトリックギターに求められているのはそういうフィールだったりするので)

もちろん、もっとポップでキャッチーな感じだったり、カントリーやブルース系、もしくはジャジィなソロと言うのもありますが、そこはやはり、曲調やジャンルにあわせて、と言う感じですね。

もう1つ、12フレット近辺のハイポジションでのフレーズを見て、今回は終わりにしましょう。

譜例4

♩ = 100

S-Gt

mf

Bm7(b5)

TAB

E7

Am7

TAB

先ほどのローポジションのものとは別に、もう一度、この周辺での各スケールのポジションを確認してから弾いてみてください。

どちらかと言えば、スケール寄りな発想のフレーズになってしまいましたが、コードトーンベースで音を選んでいるので、インターバルも見ておきましょう。

符割をそのまま弾いたような棒弾きだと、ちょっと微妙な感じになったりするので、譜面では正確には表せないのですが、タメやチョップなどのアーティキュレーションを加えて、歌うように良い感じにプレイします。

今回の譜例を参考に、色々アドリブ(ソロプレイ)の練習をしてみてくださいね。

それでは、今回は以上になります。

次回は複雑で高度(寄り)なプレイについて考えていきたいと思います。

ありがとうございました。

大沼